平成２６年度実施内容と平成２７年度活動方針(地域部会)

参考－３

開催する会議及び部会		3ヶ年（H25～27年度）			H26年度			来年度の活動内容(例示)	来年度の活動方針(案)	成果の見える化に向けた取組み内容(案)
		目標	テーマ	解決方法	実施内容	活動成果	今後の活動(案)			
全体会議										
地域部会	山部会	●WGの中で山村再生担い手づくり事例集の作成を行い、作成を通じて得られた人のつながりを活かした山村再生に向けた活動を山部会構成メンバーがおこなっていく。 ●WGの中で森づくりガイドラインの策定とモデル林によるモニタリングの試行的実施を行う。 ●WGの中で木づかいガイドラインの策定を行い、ガイドラインを活用した木づかいの仕組みを山部会構成メンバーで実行する。	(1) 山村再生担い手づくり事例集	森林の適切な管理は山村再生が重要。先ずは人づくりに取り組む。	・取材先として、川・海の団体を選定し、流域圏一体化に向けたきっかけづくりを行った。 ・「山村再生担い手づくり事例集」の対象を増やしながら、川部会・海部会とも連携しながら作成した。 ・「山村再生担い手づくり事例集(vol.2)」を作成。	●山村再生担い手づくり事例集の作成（2年目）で、新たに川や海の団体を取材先に選定し、事例集を作成。 ●森づくりガイドラインでは、代表的な森づくりの情報収集 ●木づかいガイドラインでは、作成を通じて「日本全国スギダラケ倶楽部矢作川流域支部」が結成され、今後の木づかいライブ・スギダラキャラバン実施を決定	・取材を通じて得られた取材者と取材先の交流が継続的に保たれ、流域圏の活性化につながる仕組みづくりをする。 ・取材先間の交流の場の企画について、実現の可否、実施体制を検討する。 ・長期的には、流域圏全体に周知する。方法としてホームページへの掲載などが考えられるが、企画・運営・管理についての役割分担が必要。	①既取材済み団体の活動紹介の深度化(再取材など) ②山村再生担い手同士のつながりの形成（交流の場の企画など） ③山村再生に関わる取組み活動の範囲の見える化と森づくり・木づかいとの連携（事例集取材先所在地等を反映したマップ作成など） ④事例集のPR方法の検討	●2013,2014年度に引き続き事例集の作成を行う。川や海の活動団体も取材対象とする。 ●3ヶ年の取材団体を地域や活動の種類によって検索し、取材内容を閲覧することができる地図を作成し、ホームページ（クリックして団体の活動情報を取得できる等）にアップする。	①H25~H27年度の山村再生担い手づくり事例のMAP化、ホームページへの掲載 ②代表的な森づくりの情報をパンフレット化 ③木づかいガイドラインの作成・公表
			(2) 山村ミーティング	山村再生を支援する取組みへの参加・情報共有を行う。	・WGにて関連する団体の活動など情報共有を行った(岡森フォレスターズ、中川町きこり祭りなど)。 ・山部会会議を持ち回りで実施し、地元団体からの出席がみられた。		・流域圏の人と山村の課題に取り組んでいる若者を集い語り合う「山村ミーティング」の開催に向け、実施メニューや実施体制など、具体的な企画案を検討する。 ・事例集の取材を通じて知り合った串原農林と愛知・川の会が主催して流域カフェを実施しており、今後、類似例として部会間連携を実現化するイベントの実施が期待できる。	・既存の他団体の行事と矢作川流域圏懇談会との共催・企画（矢作川きこり祭りの実施など）	●木の駅が根羽、恵那、豊田に立ち上がり、岡崎市額田町でも準備開始。これらと連携しながら新たに「矢作川きこり祭り」（仮称）の開催準備に入る。 長老ベテランの技、Iターンの若者のパワー、森林ボランティアの心意気を思う存分発揮できる「お祭り」で流域のきこりが集い、汗を流し、杯を酌み交わし、語り合う場づくりをする。	
			(3) 森づくりガイドライン	流域圏として統一性のある森林管理を行うためのガイドラインを作る。	・流域圏として統一性のある森林管理を行うためのガイドラインの作成を始めた。 ・WGにて流域圏を構成する自治体から特徴的な森づくりに関する情報収集(現地調査含む）を行った。		・各地域の特徴的な森づくりについての情報収集は、各回のWGの場でのみで行うことは困難なので、情報収集の仕組みづくりを検討する。 ・情報収集と並行してガイドライン作成を進めるには、掲載情報や作成・執筆の分担など、ガイドライン作成の進め方に関する役割分担の検討を行う。	①流域圏一体となった森づくりの課題・解決手法に関する情報共有（ガイドライン作りなど） ②山部会の他のWGとの連携（ガイドライン、事例集との連携など） ③矢作川流域圏の特徴的な森づくりに関連する情報を収集したモデル林の設置検討（特徴的な森づくりを発展させた流域圏における試験林の設置など）	●流域圏の森の統計情報、代表的、特徴的な森や樹木のリストを地図上に落とした資料作成。森づくりにおける現状と課題、解決方法を川部会、海部会へ説明、森林所有者、行政、森林組合、市民の情報共有に活用してもらう。 ●今後、矢作川流域圏の川や海に配慮した木材生産を目指すモデル林、スギ・ヒノキ人工林を針広混交林や広葉樹林へ転換していくモデル林、森林の水源涵養機能を明らかにすることを目指した試験林などについて流域の4地区にそれぞれ設定していくことを検討する。	
			(4) 木づかいガイドライン	矢作川の森の恵みが中下流・海まで届くガイドラインを作る。	・木づかいガイドラインの骨子を示し、部会で意見交換を行った。 ・意見交換を進め、市民・行政・学識者から見た木づかいの推進策をまとめた木づかいガイドライン(案)をまとめた。		・多様な情報を取りまとめるため、メンバー間の具体的な役割分担を検討する。	①木づかいガイドラインの周知・PR手法の検討(継続した提案・モニター・場所の募集など) ②スギダラどこでもシリーズの実践（スギダラ製品製作、販売業者募集など） ③スギダラキャラバンの実践（木づかいイベントの開催企画など）	●H26年度作成の提案型「木づかいガイドライン　さあ～しよう」の原案を基本に、各提案項目について可能なものから順次提案者へ原稿を依頼し作成業務を行う。順次内容を増やす。 ●並行して開催する「木づかいライブ・スギダラキャラバン」は「木づかい」推進リーダー役（稲武村森林組合）がまとめ役となって、里山市民グループ・地元工務店・地域団体等と連携しながら、流域内のイベントとジョイントを図り、地域に活力を生み出す元気な人の輪を育成する。 ●「木づかいライブ・スギダラキャラバン」開催を通して、ガイドライン等の森づくりと木づかい情報を発信し、矢作川流域の森林資源・木づかい推進活動を紹介しながらファンを増やす。 ●木育アイテムや「どこでもシリーズ」等スギダラ商品の開発を図りながら、矢作川の流域材を活用した楽しい「木のある暮らし」を広く市民に提案し普及・定着を図る。 ●「木のある暮らし」普及を基本として、市民自らアイデアと行動で身近なあらゆる生活空間をスギダラケにする市民活動を生み出し、「人生を楽しみ愛する家族と共に幸せに暮らす　森や木とそれを育む矢作川の流れと共に生きるライフスタイル　矢作川デイズ」を確立する。	
	川部会	●矢作川本川では、現況把握・評価(カルテ作成）の取組みを実践しながら、将来のあるべき姿(絵）を描く。 ●家下川では、実施中の活動の取組み効果を確認し、将来あるべき姿(絵）を描くとともに、他の場所や他の支川への展開方法を検討 ●地先の課題では、関係機関調整の場の提供と(仮）専門家リストの作成・試行的運用、個別課題の情報共有、解決の方向性検討の進展	(1) 本川モデル	計5回のWGを通じて「①生き物の移動阻害」、「②アーマーコート化」、「③微地形の多様性（瀬淵・ワンドなど）」、「④在来種の減少」、「⑤外来種対策」の5つの視点で情報共有、課題解決の方向について検討を行う。	本年度は、白浜工区や久澄橋下流を対象に微地形の多様性について、関係者と共に優先的に検討を実施。 ・現地調査等により、微地形の多様性の現況把握とともに矢作川漁協との意見交換の実現し現状と課題の情報共有が進展した。豊田市矢作川河川環境活性化プランの情報共有進展（カルテ案作成は未着手）。 ・H25年度に選定した加茂川合流点段差の現地調査実施し提案の方向性を確認(カルテ案作成は未着手）。 ・土砂管理検討委員会の検討状況について情報共有し、今後も意見交換を継続することとした。 ・河床のアーマーコート化、外来種・在来種についての検討には進展なし。	●大同大学と連携した矢作川の瀬の現状や土砂移動の実態を把握 ●個々の課題を解決する(仮）専門家リスト作成	・白浜工区や久澄橋下流の地形状況のモニタリングの継続、河道の応答状況把握をしながら微地形多様性確保方法を検討する。 ・各支川の合流箇所や瀬・ワンドのカルテ(案)の検討体制をつくる。 ・豊田市矢作川河川環境活性化プラン検討委員会と連携して検討を進める。 ・本支川合流検討箇所（加茂川合流点、家下川合流点）、寮合地区など、本WG提案事項についてフィードバックする。	①生き物の移動阻害について、支川合流点評価カルテ(案)作成・評価実施、加茂川合流点段差の改善検討 ②瀬淵・ワンド評価カルテ(案)作成・評価、保全エリアマップ作成、白浜工区のモニタリング・川の微地形把握(河床変動の技術的検討)、関係者(矢作川漁協等)との意見交換の継続、豊田市河川環境活性化プラン検討委員会との情報共有・意見交換等 ③河床のアーマーコート化について、総合土砂管理の先進地視察、総合土砂管理検討委員会との情報共有の継続、土砂のあり方等の検討 ④外来種・在来種の最新動向の情報共有、駆除活動への参加、駆除方法の改善等の検討 ⑤河川整備計画の勉強会の継続、事業内容の情報共有の継続・提案実施	●WGメンバーで加茂川合流点・家下川合流点における移動阻害の改善状況のモニタリングに取り組む。 ●微地形の多様性（瀬淵・ワンドなど）について、WGメンバーで現地調査や関係者との意見交換、豊田市河川環境活性化プラン検討委員会との連携を進め、(仮）保全エリアマップを作成する。 ●低水路拡幅後の河道の応答状況を把握するため、定期的な目視による観測に加え、河床形状の測量を行うことにより、学識者を主体として白浜工区をモニタリングする。 ●総合土砂管理の知見を深めるため、WGメンバーで先進地域を視察し、総合土砂管理検討委員会との情報共有を継続する。	①川のあるべき姿の共有 （仮）保全エリアマップの作成など） ②活動団体へのヒアリング結果のデータベース化（テーマ(1)との連携） ③活動団体MAPの作成/専門家リストの充実
			(2) 家下川モデル	計4回のWGを通じて「①情報不足」、「②生き物の移動阻害」、「③生き物の棲みかの不足」、「④水量不足」の4つの視点で情報共有、課題解決の方向性について検討を行う。	本年度は、家下川-承水溝-長池の段差解消について、関係者と共に優先的に検討を実施。 ・移動阻害箇所の情報収集を継続し、関係者との意見交換を行うことにより、段差解消方法について検討を深めた（具体的な検討を継続予定）。 ・生き物の棲みかの不足に対する活動内容・効果の情報共有ができたが、その改良方法や他の場所への展開は未着手。承水溝について検討し、棲みかを確保する方向性について提案した。 ・水量不足については進展なし。		・承水溝-長池の段差改善や承水溝の浚渫の提案について、管理者と連携しながら解決策を検討する。 ・水源確保については、より詳細な情報収集を進める。	①生き物の移動阻害について、移動阻害箇所の情報収集の継続、排水機場の改善に伴う段差解消方法の検討、矢板切り欠き箇所のモニタリング ②生き物の棲みか不足について、リバーキーパーズの活動効果の情報共有、他の場所への展開の検討、承水溝の浚渫に対する提案 ③水量不足について、水源（家下川、農業用水、地下水など）の情報共有・現地調査、ひょうたん池（長池）の水量確保の可能性の検討	●生き物の移動阻害について、管理者と連携して排水機場の改善に伴う段差解消方法の検討を継続する（優先課題①） ●生き物の棲みかの不足について、承水溝の浚渫方法に対する提案を具体化する（優先課題②） ●水量不足について、水源の情報収集・現地踏査を実施し、新たな情報が得られた段階でひょうたん池(長池）の水量確保の可能性の検討を進める。 ●矢作川の他支川での活動展開を検討する。	
			(3) 地先モデル	計2回のWGを通して、「①活動環境の課題」、「②活動推進上の課題」の２つの視点で情報共有、課題解決の方向性について検討を行う。	今年度は、活動団体へのヒアリング、アンケート調査を優先的に実施し、活動上の課題を把握。 ・一昨年度に続き、岡崎市、豊田市の活動団体のヒアリング実施。更に広く活動団体の状況把握のため、アンケートを実施。 ・個々の課題解決に向けて、ヒアリングと通じて意見交換できた。 ・(仮)専門家リストのたたき台を作成した。 ・アンケート調査により、矢作川流域に関わる地先の活動団体の地先の裾野は若干広がった。活動団体等のリスト化は未着手。		・これまでの活動団体ヒアリングやアンケート調査を通じて把握できた地先の課題を集約し、地先の課題の全体像を整理する。 ・個別課題の検討の場や関係機関の調整の場の提供方法を考える。 ・(仮)専門家リストは、今後、一般に活用できるリストとして充実を図る。	①活動環境に関する課題について、活動団体へのヒアリングの継続（地先の課題抽出）、流域圏懇談会活動に参加していない団体へのアプローチとして公開ヒアリング(仮称)の実施、活動団体マップ作成（川に関わる活動団体の把握）、個別課題の情報共有・解決の方向性の検討 ②活動推進上の課題について、(仮)専門家リストの充実・試行運用、関係機関、市民の意見を反映した河川空間利用の調整の場の提供	●協力いただける活動団体のヒアリング（公開ヒアリング（仮称）の実施）を継続しながら、個別課題の解決の方向性を検討（事業実施に関わる地域の活動団体を対象とすることも考えられる） ●ヒアリング・アンケート等を活用して、活動団体マップを作成する。 ●WGメンバーからの情報共有により、(仮)専門家リストの充実・改良を図り、まずはWGメンバーで共有する。	
	海部会	●海への理解はまだまだ浅く、フィールドワークを主体とするWGや勉強会などの実施により、積極的な情報発信・情報共有を図り、流域市民の海への理解を深める。 ●海に大きく影響する流域圏問題（土砂、ごみ等）を流域圏市民全体で問題意識を共有し、話し合いを進め、様々な主体ができることより実践する。また、将来的に解決に結びつけるためのヒントを関係者の話し合いによってそれぞれの考え方を整理していく。	(1) ごみ・流木の問題	西の浜と佐久島で他団体や山・川部会メンバーと連携してごみ・流木調査を実施し、漂着ごみの実態把握と問題意識の共有化を図る。	(3ヶ年運営方針) ・2ヶ年め以降は、管理者の処理が行き届かない流木ごみの再漂流防止のため、市民活動での処理方法や再利用ニーズなどを調査（個々に情報を持ち帰り）。 ・県が進めるごみMAPへの調査結果の活用検討などを次年度以降も引き続き、様々な関係者と連携していく。 (実施内容) ・西の浜と佐久島で他団体や山・川部会メンバーと連携してごみ・流木調査を実施し、漂着ごみの実態と問題意識を共有することができた。 ・イベントや調査に参加した子どもや保護者の反応や意識を直に確認できた。	●ごみ・流木調査を山・川のメンバーと一緒に実施（2年目） ●小学生を持つ親子の海に対する意向を3回のイベントアンケートより把握 ●矢作ダムの砂を活用した干潟の試験造成を開始	・市民活動での流木ごみの処理方法や再利用ニーズなどの調査を進めていく。 ・他部会メンバーや他プロジェクトとの連携を進めていく。 ・矢作川での出水後のごみ・流木調査実施 ・発生源を特定するための調査方法を検討。 ・調査結果のPR方法を検討。	①ごみ・流木調査の継続実施（矢作川出水後の調査/山・川部会との連携/海底ごみ調査など） ②調査結果の整理・分析方法の検討（ごみMAP作成/調査結果のデータベース化/発生源等の特定方法の検討など） ③流木等の自然由来の処理方法の検討（市民活動での処理方法検討/再利用ニーズ調査実施/「木づかい」との連携など） ④流域連携に向けたPR方法の検討（調査結果報告会の実施/写真・パネル展実施/パンフ・ポスター作成/他プロジェクトとの連携など）	●山・川と連携したごみ・流木調査の実施 山・川部会メンバーと合同でごみ・流木調査を実施し、ごみ・流木の現状と問題意識を流域圏全体で共有する。同時に発生源の特定方法や「木づかい」と連携した流木再利用方法の検討などの解決策について意見交換を行う。併せて、調査結果の活用、PR方法（データベース化、ごみMAP作成など）を検討する。 ●他団体の啓発イベントに参加して海部会の活動報告会を行う。 奈佐の浜プロジェクトや愛知県の啓発活動と連携し、海部会の活動報告などを行い、情報発信・共有を進める。また、主催団体や運営スタッフ等へのアンケート調査を行い、市民活動での処理方法や再利用ニーズ等に関する課題を把握する。	①ごみ・流木調査結果のデータベース化、MAP化 ②生き物モニタリング調査結果のデータベース化
			(2) 豊かな海の生物調査	三河湾の干潟・浅場造成に関する行政計画や事業内容、愛知県が実施した海底ごみ・生き物調査の結果を情報共有するとともに、農業調査を通じて干潟や背後の土地利用の問題を共有する。	(3ヶ年運営方針) ・ハンドブック等を活用した干潟環境見学会の実施 ・勉強会実施による三河湾再生プロジェクト等の総合的な海の情報共有の推進 ・ごみの生物影響に関する情報収集と共有 ・水産試験場や漁業者等との連携による調査結果などを活用した、流域圏の干潟生物等のアーカイブ作成（環境学習にも使えるパネル等の作成） (実施内容) ・干潟の生き物として鳥の観察・調査を実施した。特に、干潟後背地の土地利用や開発を一体の問題として考えることの重要性を確認・共有した。 ・三河湾環境再生プロジェクト行動計画等の策定経緯や内容、愛知県実施の海底ごみ・生き物調査の結果について、情報共有することができた。		・海部会メンバーや関係機関が所有する生き物に関する情報を引き続き共有する。 ・干潟の必要性や生物生息状況のPR実施 ・テーマ(4)と一体となり、新たに造成する干潟のモニタリング調査を検討する。	①干潟生物調査の継続実施（海部会構成団体の活動との連携） ②調査結果の活用方法の検討（調査結果のデータベース化/生き物パネルの作成/その他PR方法検討など） ③総合的な海の情報共有（生物影響ごみの情報収集/海底のごみ調査/干潟の必要性検討など）	●勉強会の開催 メンバーの専門性を活かして、鳥類の生態から豊かな海を考える勉強会の第2弾や別水域における環境再生の取組みの勉強会などを実施する。 ●生物モニタリング調査の計画の検討 河口干潟において、干潟生物調査を実施する。矢作ダムの砂を活用して試験的に造成する干潟の効果を検証・PRするため、生物のモニタリング調査の計画を検討し、調査を実施する。併せて、調査結果の活用、PR方法（データベース化、パネルや冊子作成など）を検討する。	
			(3) 海と人の絆再生	様々な場面でのアンケート調査等を通じて、子どもや保護者の海に対する意識やニーズを把握する。	(3ヶ年運営方針) ・海から遠のいてしまった子どもの遊び場としての干潟づくりを漁協等の関係者と検討（部分的干潟開放、水場・緑陰等の整備検討） ・生き物調査や清掃活動などの環境学習への参加を目指した学校関係者等との意見交換) ・海での様々な活動者の発掘と活動支援の推進 ・海への理解を深めるための勉強会や現地見学会の実施 (実施内容) ・様々な場面でのアンケート調査等を通じて、子どもや保護者の海に対する意識やニーズを把握することができた。 ・テーマ(4)とのからみで干潟づくりに関する検討が進捗		・テーマ(4)と一体となり、干潟づくりと環境学習・啓発活動の展開を検討していく。	①海に関心を持ってもらう啓発活動の実施（食イベント/小学生との交流イベント/学校関係者との意見交換など） ②干潟へのアクセス改善の検討（干潟の部分開放/干潟へのアクセス改善（改善箇所の検討）など） ③海での活動者の発掘・連携（三河湾での海の交流活動調査/部会構成団体の活動報告会の実施/活動連携の意向調査など）	●啓発イベントの検討・実施 矢作ダムの砂を活用して試験的に造成する干潟をフィールドとし、干潟観察や鳥類観察などのイベントを開催し、小学生や学校関係者との交流や啓発活動を行う。その中で干潟へのアクセス改善の検討を行う。 ●漁業者との交流会の企画提案 海部会がコアとなって漁業者との交流会の企画（人選やテーマ）を検討し、流域圏全体に提案を行う。	
			(4) 干潟・ヨシ原再生	矢作ダムの砂を活用した干潟造成の試験施工について、関係機関の協力を得て実現する。	(3ヶ年運営方針) ・河口部の干潟・ヨシ原再生箇所における生き物のモニタリング調査 ・関係者(漁業者、市民、学識、行政等）を交えた、今後の左岸河口部等の干潟再生事業箇所における望ましい再生の姿の検討 ・干潟現地見学会の実施（河口干潟や人工干潟の対比、西浦などの干潟再生事例箇所などの調査の実施） ・ダム砂や川砂の実態調査や山地域との課題認識等の情報交換の実施 (実施内容・活動結果) ・矢作ダムの砂を活用して干潟を実験的に造成する活動について、ダム管理者や海岸管理者、地元自治体、漁業者などの関係機関の協力を得て実現することが決まった。		・仮置き場から所定の造成場所に砂を搬入する方法や役割分担についてつめる。 ・矢作ダムの砂を使って造成した干潟のPRや保全・活用を検討していく。 ・山・川部会との交流や流域連携の拠点としての有効活用を検討していく。	①矢作ダムの砂を活用して試験造成する干潟のモニタリングの検討（環境モニタリング計画の検討/調査結果のデータベース化・公開方法の検討など） ②造成干潟のPR方法の検討（海部会構成団体との連携/記者発表/SNSの活用/学会発表など） ③造成干潟の活用方策の検討（交流・啓発イベントの検討・実施/市民参加のモニタリング調査の検討など） ④流域連携に向けた活動検討（山・海部会との情報共有・活動連携/愛知県西浦人工干潟との姉妹干潟交流・情報交換など）	●矢作ダムの砂を活用して試験造成する干潟の保全・活用方策の検討 矢作ダムの砂を活用して試験造成する干潟をフィールドとして、モニタリングや流域圏内外へのPR、活用方策などを検討し、他の3つのテーマを束ねながら流域連携を牽引する活動を実践する。	
市民会議		●山・川・海部会WGの活動状況の情報共有により相互理解・連帯感の向上を図る。 ●流域連携テーマについての情報共有と活動に向けたアイデアを出す。								
勉強会										